

アメリカ革命とインディアン

— デラウエア族・モラビア教徒・北西部 —

白井洋子

はじめに

アメリカ独立革命戦争は、ヨーロッパ系植民者によるイギリス重商主義支配からの離脱を目的としていたばかりではなく、北米大陸の先住民諸部族に対する征服戦争としての性格をも備えていた。そしてこのインディアン征服戦争の主たる戦場となったのが、のちに合衆国が北西部領地と定めた領域の東部を占めるエリー湖、ミシガン湖南岸からオハイオ川にかけての広大な地域であった。

デラウエア族は、このオハイオ北西部を生活圏としていたインディアンの中でも有力部族の一つだった。かれらは元来ペンシルベニア植民地東部一帯の先住民であったが、白人入植者の増大により次々に土地を奪われ、革命戦争当時はその多くがオハイオ地域を第二の故郷としていた。戦

争が始まると、オハイオ・インディアンのほとんどがイギリス軍と同盟を結び、アメリカ軍と戦った。デラウエア族は、しばらくは中立の立場を維持していたが、戦局の進展とともに、一七七八年にはアメリカ側との同盟に入った。

一八世紀に入って以来のデラウエア族の歴史を概観すれば、それは先祖伝来の土地を追われて西方オハイオの土地へ避難を求めた歴史だったことは一目瞭然である。それにもかかわらず、デラウエア族はなぜアメリカ側との同盟に踏み切ったのか。この問題に答えるためには、デラウエア族をも含めたインディアン勢力がアメリカ革命をどのように受け止めていたのかという点が、アメリカ革命政府のインディアン政策との関連で明らかにされねばならないであろう。本稿では、革命戦争勃発から、「ジョージ・ワシントンのインディアン戦争」と呼ばれた時期、すなわちオハ

イオのインディアン部族連合軍が合衆国軍隊に敗北を喫し、グリーンビル条約締結にいたる一七九〇年から九五五年までの、いわばアメリカ革命が先に述べた独立と征服の両面を完結させるに要した二〇年間におけるインディアンと白人の関係を、主としてデラウェア族のアメリカ革命への対応と革命政府側のインディアン政策との関連において検討することを目的としている。

オハイオ地域のデラウェアの人びとはまた、キリスト教プロテスタントの一派であるモラビア教徒との間に深い信頼関係を築き上げていたことでも、他の部族の人びとは異なる歴史的背景をもっていた。モラビア教徒とデラウェア族との接触は一七四〇年代のペンシルベニア東部に始まるが、同派の布教活動がなせデラウェア族に受け入れられたのかという点も、デラウェア族のアメリカ革命への対応の理解に繋がる問題を含んでいると思われる。近年、インディアンへのキリスト教布教に関連した研究成果の中でも、布教の問題をインディアン社会の文化変容という視角のみならず、アメリカ「帝国」によるインディアン「文明化」政策の流れの中に位置づけて説明しようとする傾向が顕著である。モラビア派の布教活動はこれまであまり研究の対象とはされてこなかったが、同派の宣教師の献身的な活動は北米におけるキリスト教布教史の中でも高い評価を受け

てきた。しかし献身的な布教活動を通して築かれたインディアンとの信頼関係と、布教活動を根底から支えていたインディアン「文明化」の理念とが、どのように結びつけられていたのかという問題の掘り下げについては、今後モラビア派の布教活動の研究をすすめていく上で深められねばならない課題であると思われる。^③

一七八三年のパリ条約締結以後のオハイオ・インディアンの抵抗は、合衆国政府にインディアン政策の見直しを迫った。それはたとえ表面的なものであるにせよ、独立宣言に見られる「わが辺境の住民に対し、年齢、性別、貴賤の区別なく全面的破滅を戦争の法則とする苛酷なインディアン蛮族」という表現から、一七八七年に制定された北西部領地条例の「インディアンに対しては常に最高の信義が守られなければならない」の文言への変化からも明らかである。^④ インディアンに対しての信義が守られたかどうかはその後の合衆国史がよく語っているところではあるが、オハイオ・インディアン征服戦争からの教訓と、一九世紀に入り本格的展開を見せるインディアン「文明化」政策とがどのような関係にあったのかについても、本稿の中で触れてみたい点である。

一 モラビア派の布教活動とデラウエア・インディアン

〈モラビア派とデラウエア族〉

アメリカ革命以前のペンシルベニア植民地では、クリスチャン・インディアンとはモラビア派に改宗した、またはモラビア派宣教師の教えを受け入れたインディアンとほとんど同義語といってもよい。

モラビア派の起源は一五世紀半ばにジョン・フスやジョン・ウイクリフの影響の下にボヘミアに生まれたプロテスタントの小宗派に求められる。三十年戦争の時期にはカトリック教会とプロテスタント諸派からの弾圧により壊滅状態に陥ったが、一七二〇年代にドイツ敬虔主義派のツィンツェンドルフ (Nikolaus Ludwig Zinzendorf, 1700-60) の保護を受けて再興を果たした。その厳しい弾圧の体験はモラビア教徒たちに「隠れた種」という強い信仰心を植えつけ、その宗教的自覚が西インド諸島海域やグリーンランド、南アフリカ、ラップランド、アルジェリア、セイロンなどに住む、キリスト教とは無縁と思われる人びとへの布教活動の原動力となった。北米大陸での布教は一七三五年にジョージアのクリーク族との接触によって開始された。しかし一七三九年にイギリスとフロリダのスペイン勢力と

が戦争状態に入ると、モラビア教徒たちはこの地での布教を断念し、ちょうどその頃ペンシルベニアのフィラデルフィアを訪れていたメソジスト派のジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-70) の招きを受けてフィラデルフィアの北^⑤のちのベツレヘムに赴き、そこを布教の根拠地とした。

ペンシルベニアでのモラビア派による布教活動は、まず近隣インディアン部族の言葉を学ぶことと並行して、イロコイ六部族連合との接触から始められた。一七四五年、モラビア派の若い宣教師デービッド・ジースバーガー (David Ziesberger, 1721-1808) はイロコイの部族連合会議が開かれる地、オノンダガを訪れ、布教の許可を得ている。ジースバーガーはオノンダガの家族の一員として迎えられるまでに信頼されたが、イロコイ・インディアンへの布教は結果的には失敗に終わった。しかしイロコイとの接触はペンシルベニアの土地を生活圏とするデラウエア族への布教の道を開く上で重要だった。当時、イロコイ連合はニューヨークからペンシルベニア一帯に居住する部族を支配統括する位置にあり、どの部族と接触するにしてもイロコイの同意を受けておくことが必要とされていたからである。^⑦

北米インディアンへの布教に際して、モラビア教徒たち

はツインツェンドルフの教えに忠実に従った。それは第一に、異教徒（インディアン）の中に神の言葉に耳を傾け信仰を受け入れそうな者が一人でもいないかどうかを冷静に観察すること、第二に、もし一人でもそのような者がいたら、その者に福音を説くこと、第三に、これまで一度もキリストの教えに触れたことがない異教徒にこそ福音は説かれねばならない、なぜならモラビア教徒の任務は世間から見捨てられた人びとをさがし求めることに意味がある、というものだった。モラビア教徒たちはインディアンの言葉を学ぶためにインディアンと生活を共にする努力を惜しまなかった。ベツレヘムの町にはインディアン語学校も設立された。このような布教活動に専念するモラビア教徒に対して、クエーカー主義の伝統の色濃いペンシルベニアでありながら、クエーカー教徒に対する以上の信頼がデラウェアの人びとから寄せられたのだった。しかしながらモラビア派の布教活動の基本は定住農耕作業を基礎としたインディアンの新しい共同体づくりであり、その共同体の規律がインディアン社会の伝統的風習である祈りやさまざまな踊りを禁じていたことは、キリスト教他派の「文明化」政策とその本質において何ら変わりのなかったことを示している。ただ、モラビア教徒たちが、インディアンやインディアンの生活習慣を野蛮なものとして最初から切り捨てたり、否

定するのではなく、理解しようとする努力をしたこと、また先祖伝来の土地から追われゆくインディアンの運命に同情的であったことなどが、他派の布教姿勢との相違点であったといえるよう。モラビア教徒がとりわけデラウェア族に対して同情的であったことも、かれらがペンシルベニアで布教を始めた時期と、英領植民地の内陸部におけるインディアン戦争の開始時期が重なっていたこと、そして一七四〇年代のジョージ王戦争からポンティアック戦争に至るまでの二十数年にもおよぶインディアン戦争の舞台となってきたペンシルベニア西部の歴史的背景と切り離しては考えられないだろう。

〈伝道村の建設〉

モラビア派の宣教師たちは、一七四六年にベツレヘムより二五マイル北に最初のクリスチャン・インディアンの共同体であるグナードンヒュッテン（神の恵みの集落の意、現在のリーハイトン）を建設した。この村にはニューヨークやニューイングランドからも改宗したインディアンが加わり、一七四九年には改宗していない者も含め住人は五百人に及んだといわれる。そこではデラウェア語はもちろんのこと、デラウェア族について多数派を占めていたモヒガン族の人びとに対してはモヒガン語で説教が行われた。モラビア教徒による布教活動は、七年戦争以前にすでにア

パラチア山脈を越えたサスケハナ川流域に達していた。あの宣教師はサスケハナ川流域に点在するインディアンの村々を回り四年間で八九人に洗礼を施している。インディアンの洗礼を施す基準はカトリックやピューリタンに比べると、モラビア派の場合には必ずしも明確ではなかった。また一六世紀末から一七世紀前半にかけてカナダのイエズス会士やニューイングランドのピューリタンが、インディアンへの布教活動を通して展開した、キリスト教への改宗が先か、それとも「文明化」が先か、という議論も、モラビア派宣教師たちの間ではあまり問題とされてはいない。「文明化」を論ずるより以前に、当時のペンシルベニアのインディアンたちが直面していた現実、すなわち度重なる戦争への恐怖、土地を追われた人びとの飢えと寒さとの戦い、病気や死への不安など、生存にかかわる切実な問題が、ペンシルベニアのモラビア教徒をしてインディアンのキリスト教への改宗とかれらを「文明化」に導く仕事を無理のない一体化の方向に向かわせた。事実、グナーデンヒュッテンの農耕を中心とした共同体はそこに集まったインディアンたちを飢えや寒さから守るための役割を果たした。モラビア教徒にとってインディアンの「文明化」とは、かれらにキリストの教えを説きながらも、現実のさまざまな苦難からかれらを解放することを意味していたのにはかならない。

しかし七年戦争（1756—1763）とそれに続くポンティアック戦争（1763—65）は、この二つの戦争の主要な舞台となったペンシルベニアの西部に住むクリスチャン・インディアンを微妙な立場へと追い込んだ。七年戦争においては、西からはフランス側と同盟したインディアンが、東からは、キリスト教に改宗したインディアンであれ白人住民に友好的なインディアンであれ、インディアンならすべて敵とみなす白人開拓民が、かれらを挟み撃ちにした。このことはポンティアック戦争においても同様だった。武器を取らずに中立・平和主義を貫こうとするクリスチャン・インディアンの立場は、命をかけて侵略者と戦うインディアン同胞からすれば裏切り行為に等しかった。結局、この二つの戦争中、イギリス勢力に敵対的なインディアンの攻撃によりグナーデンヒュッテンの村は破壊された。モラビア派の宣教師たちは、クリスチャン・インディアンをベツレヘムに近いナザレの町に避難させたが、今度はインディアンに反感を抱く白人住民の武力攻撃が激しくなり、ついに一七六三年十一月、ジースバーガーらは生き残った一二五人の改宗者とともに植民地政府の保護を求めてフィラデルフィアに向かった¹⁰。

クリスチャン・インディアンがフィラデルフィアに避難した直後の一七六三年十二月、フィラデルフィアから六〇

マイルほど西のサスケハナ川流域に住み、近隣の白人と友好関係にあったコネストガ・インディアン(サスケハナ族)が、近くのパクストン村からやってきた五〇余人の白人武装集団に襲われ、年寄りと子供、女性の計六人が虐殺される事件が起こった。クエーカー教徒らの抗議により植民地政府はただちにコネストガ・インディアンの生存者を近くのランカスターにある収容所に保護した。その二週間後、またしてもパクストンからの、今度は百人余の武装集団の襲撃によりコネストガ・インディアンの生存者一四人全員が殺害された。これがアメリカ革命前史において、開拓農民が西部防衛の強化を要求して東部支配層への抗議行動に立ち上がったとして知られるパクストン・ボーイズの一揆の裏面である。パクストン・ボーイズは、フィラデルフィアに保護されていたクリスチャン・インディアンをも襲撃すると豪語した。植民地政府はこのインディアンたちをニューヨークに避難させようとするが、結局ニューヨーク植民地政府がインディアンの受け入れを拒否したため、ふたたびフィラデルフィアに連れ戻された一二五人のインディアンたちは、市の南にあったバラック小屋に収容され、そこで一年を過ごした。不自由な避難生活は伝染病との戦いの日々となり、避難中に天然痘や熱病のために五六人が命を落とした。パクストン・ボーイズの襲撃に見られるような事件

は当時、白人開拓民の波が押し寄せたフロンティア地域においては日常茶飯事であり、平和・中立の立場をとるインディアンたちは、すべてのインディアンを敵と見なす白人開拓民にとって格好の攻撃目標とされたのだった。

〈オハイオへの移住〉

一七六五年春、宣教師のジースバーガーらはフィラデルフィアで生き残った改宗者を含め九〇人のインディアンとともにサスケハナ川流域に新しい共同体フリーデンヒュッテン(安らぎの集落の意)を築いた。その後、一七六八年には西部のアレゲネー川流域のゴシュゴジャンク、一七七〇年にはオハイオ川支流のビーバー川流域にフリーデンスシュタット(安らぎの町の意)と、次々にインディアンへの布教目的の伝道村を建設した。しかし、ポンティアック戦争後、白人開拓民のインディアンに対する反感が一段と激しさを増す一方で、アレゲネー川やオハイオ川流域に住むインディアンの間では、ヨーロッパ人の宗教であるキリスト教を自分たちの宗教や伝統的な生活習慣への脅威として受け止める傾向が強くなってきたことも確かだった。

モラビア派によるインディアンへの布教活動がその最盛期を迎えたのは、一七七二年にオハイオ川の支流、マスキングラム川のさらに支流をなすタスカラワ川流域(現在のオ

ハイオ州カントンから約二〇マイル南)に、第二のグナーデンヒュッテンと、新たにシェーンブルン(美しい泉の意)の二つの伝道村を築いてからのことだった。この土地は、この辺り一帯を生活圏とするデラウェア族の一族の指導者でキリスト教に好意と関心を寄せていたネタワトウィズが、モラビア派の宣教師とクリスチャン・インディアンに提供したものであった。ここまで西に来ると、少なくとも白人入植者の西漸の波からは煩わされることもなく、ピッツバーグ付近に住むインディアンたちのキリスト教布教に対する警戒心からも解放された。かれらにとってさらに幸運だったのは、マスキングラム川流域に住む部族の長たちがこの地域一帯での布教の許可をモラビア派宣教師に与えたこと、またオハイオ地域の有力な部族でこの地域の本来の占有者であったワイアンドット族が、さらに広大な土地をクリスチャン・インディアンに提供してくれたことだった。一七七五年末には、シェーンブルンとグナーデンヒュッテンは約四百人のクリスチャン・インディアン^①の住人を抱えるまでに発展した。

二 革命戦争とオハイオ・インディアン

〈アメリカ革命とインディアン〉

革命戦争が本格化すると、アメリカ側はインディアン諸部族に対して、この戦争はインディアンにはかかわりのない「身内の争い」であると説明し、中立の立場を取ることを要請した。インディアン諸部族との間に強力な友好関係をもたないアメリカ側は、インディアン勢力を味方にはつけられなくとも敵にまわすことだけは、何としても避けなかったからである。一七七五年十月にはピッツバーグで大陸会議代表と、イロコイ六部族連合、デラウェア族、ショーニー族との間で平和条約が結ばれ、オハイオ川をインディアン領と白人入植地との境界線とすることが確認された。この条約内容は、一七六八年にイギリス政府とインディアン部族との間に結ばれたフォート・スタンウィクス条約を大陸会議側が再確認したものである。

それでは中立的立場を要請してきた大陸会議側の意向に対して、オハイオ地域のインディアンたちはこの革命戦争をどのように位置づけていたのだろうか。まず、イギリス側からの同盟の呼びかけに直ちに応じてアメリカ勢を敵とした部族には、オハイオ西部のワイアンドット(ヒューロン)、チペワ(オジブワ)、ショーニー、ミンゴ(オハイ

オ・イロコイ)があげられる。これらの部族は、七年戦争、ポントリアック戦争ではイギリス軍とアメリカ植民地とを相手に戦ったが、今度の革命戦争においてはイギリス側と同盟を組むことでアメリカ勢から自分たちの土地を取り戻すことを最大の目標においた。イギリス軍との同盟に入る以前に、ショーニー族はオハイオ地域への白人の進出を阻止するためにバージニア民兵隊とすでに一戦を交えていた(ダンモア卿の戦い)。南部のチェロキー族も、白人たちの「身内の争い」を、かれらの土地を奪い返すための好機と判断し、両カロライナとバージニアの開拓地を攻撃した。ショーニー族もチェロキー族も戦いに敗れ、境界線の後退を余儀なくされる結果に終わった。

しかしデラウェア族の場合は別だった。デラウェア族は、中立的にというよりは、平和的にこの危機を乗り越えようとしたのである。本来は東部海岸地域の先住民であり、七年戦争とポントリアック戦争では先祖伝来の土地の奪回を目指したが果たせず、避難先のオハイオに愛着をもちはじめていたデラウェアの人びとが求めていたのは、奪われた土地を取り戻すことよりも、オハイオの土地に安住する権利を白人、すなわちアメリカ側に認めさせることだったのである。これまで苦汁を嘗めながらも一七七五年の平和条約を受け入れた理由もそこにあった。

このように、革命戦争に際してのインディアン側の対応は一樣ではなかった。しかし共通していたのは、各部族がそれぞれに自らの目標を設定し、独自の判断の下に立ち上がった点にある。アメリカ独立革命戦争はインディアン諸部族にとっても自由と独立を求めた戦いを意味していた。

ところで戦況の進展につれてジョージ・ワシントンを経司令官とするアメリカ側は重大な作戦の変更に乗り出した。それは、内陸部にあるイギリス軍の拠点、ナイアガラとデトロイトの二つの要塞の攻略に、イロコイ連合とデラウェア族を軍事力として利用しようとしたことだった。独立宣言が発表される前の一七七六年四月、ワシントンは作戦の変更を大陸会議に伝え、それを受けた大陸会議は五月にはワシントンの要請を認める決議を出した。^⑤このことは戦争勃発時に大陸会議が諸部族に中立の立場を要請した政策を根本から覆したことを意味していた。しかもこの政策変更が決定されたのは、元毛皮交易商人でインディアン問題中部地区担当官のジョージ・モーガン (George Morgan, 1743-1810) がオハイオ地域の諸部族との間の平和友好関係を強化するために奔走していた最中のことであった。平和・中立から軍事同盟へというインディアン政策の転換がアメリカの将来に及ぼすであろう重大な影響を見通していたモーガンは、この突然の変更の指示を無視し、従来通り

の方針の下、七六年秋にピッツバーグでデラウェア族、モヒカン族、ショーニー族、イロコイ連合の指導者たちとの間に平和条約を結ぶことに成功した。この条約は、合衆国とインディアン部族との間に正式に結ばれた最初の平和条約であり、インディアン側から過去の苦しみや悲しみ、怒りのすべてを涙で洗い流すことが述べられたのちに、両者が相互の主権と自由を認め合うという内容であった。

〈デラウェア族の選択〉

アメリカ側のインディアン政策に重大な変更がもたらされようとしていたときに、インディアン部族の自由と独立の権利を大陸会議に認めさせるための積極的な働きかけを実行に移した者がいた。デラウェア族の指導者の一人ホワイト・アイズ（白い眼）は、七五年のピッツバーグ条約締結後、フィラデルフィアを訪れ、そこに半年間滞在し、部族が独立した地位と居住領域の主権、将来の選択に関する自決権をもつことを大陸会議の代表たちに訴えたのである。インディアン勢力とイギリス軍との同盟を最大の軍事的脅威と感じていた大陸会議代表たちにとっては、アメリカ軍の西部の拠点であるピッツバーグからイギリス軍の要塞デトロイトへの攻略ルートにあたるオハイオ東部を生活圏とするデラウェア族は何としても味方につけたい相手だった。

ホワイト・アイズの訴えは基本的には受け入れられたものの、大陸会議側の提示した条件にはデラウェア族の将来にかかわるいくつかの重大な問題点が含まれていた。

ホワイト・アイズの立場は中立的というよりは親米的だった。彼はこの戦争にアメリカ側が勝利を収めたときのことを念頭におき、その立場からの独自外交を愛国派の指導者たちを相手に進めたのである。七六年五月にホワイト・アイズがオハイオにもち返った大陸会議からの文書には要約すると次の三点が記されていた。(1)キリスト教の理解にふさわしい聖職者と学校教師、農工技術指導者のオハイオへの派遣、(2)オハイオ北西部におけるデラウェア族の主権の承認と平和友好関係に基づいた交易の確立、(3)デラウェア族とイロコイ連合との友好関係の回復。

(1)の聖職者とは具体的にはエピソード派を指している。これはイギリス国教会の流れを汲む大陸会議代表に対するホワイト・アイズの譲歩を意味していた。(2)はインディアン諸部族がこれまでヨーロッパ人入植者に主張し続けてきた点であり、インディアンの同意と公正な取引に基づかない白人の侵入はすべて不法であることを大陸会議が認めたものだった。(3)は(2)のデラウェア族の主権と関連する問題である。ペンシルベニア東部から避難してきたデラウェア族にオハイオの土地を提供してくれたのはワイアンドット

族だった。その領域はモラビア派のクリスチャン・インディアンに認められた土地も含めると、北はエリー湖、東はフォート・プレスカイル、南はマスキングム川の西側の支流、西はサンダスキー川に挟まれた、現在のオハイオ州のおよそ東半分にあたる地域である。ところがイロコイ連合がワイアンドット族に対抗してこの土地の占有権を主張していたことから、大陸会議側はこの土地のデラウェア領有権についてイロコイ連合から承認を得ることを要求してきたのだ。一七世紀末以来、イロコイに優越的地位を認めることでイロコイを他部族支配の道具としてきたイギリスのインディアン政策の枠から自由になりきれず、むしろそれを継承していた大陸会議は、イロコイの同意なしに他部族の土地領有権を認めることに躊躇する消極的な姿勢にとどまっていた。またそこには、イロコイの軍事を自陣に利用したいとする大陸会議側の都合も働いていた¹⁸⁾。

(2)の内容それ自体は従来のインディアン・白人関係からは前進したことを評価できても、(1)と(3)は大きな問題を孕んでいた。まずデラウェア族にとってキリスト教徒とはモラビア派を指していたに等しかった。また自由と独立を求めるデラウェア族の人びとにとりイロコイの優越的地位を認めるような条件はとうてい受け入れられないものだった。しかもイロコイ連合と他部族との間の支配従属関係の実態

は七年戦争以前にすでに崩壊したも同然の状態にあり、(3)が条件とされる以上、大陸会議がデラウェア族の土地領有権を認めるといってもそれは絵に描いた餅にすぎなかった。大陸会議側は同じ文書の中で次のようにも述べている。

「われわれはこの大地にともに暮らすわれわれのすべての兄弟、インディアン・ネイションズの平和と幸福とが長く続くように努力したい。あなた方の生活と安全がわれわれを必要とするのであれば、われわれはいつでもあなた方をお守りしたい。」この一文は、インディアンの防衛を口実に大陸会議側がインディアンの土地に侵入する危険性を孕んでいると同時に、アメリカ側が危険に曝されたときにはインディアンにも防衛義務ありとする軍事同盟的な要素を多分に含んでいた。ホワイト・アイズの外交努力がデラウェア族の他の指導者たちの承認を得られなかったのは当然だったといえる¹⁹⁾。

戦局が緊迫度を高めるにつれて、英米両陣営からのオハイオ・インディアンへの圧力も高まった。デラウェア族に對してはすでにイギリス側についているワイアンドット族から何度も脅迫に似た呼びかけがあった。デラウェアの指導者の一人でモラビア派の布教活動に反感を抱いていたキャプテン・パイプは、七七年秋にワイアンドット族の誘いに応じて彼の一族を引き連れ、サンダスキー川上流に居を移

した。同じ頃、ショーニー族もサイオト川流域の村々からワイアンドット族の村に近いマッド川上流域へと避難し始めた。オハイオ地域に平和主義の旗を掲げるのはモラビア派の伝道村に住むクリスチャン・インディアンと、その周辺のモラビア教徒に好意的なデラウェアの人びとに限られてしまった。しかしモラビア派の本部はベツレヘムにあり、宣教師たちにとって東部との連絡は不可欠であったこと、また宣教師たちがピッツバーグに駐屯するペンシルベニア軍からの要請で食糧や情報を提供していたことから、モラビア派宣教師たちはイギリス側についていたインディアンからはアメリカ側のスパイと見なされていた。²⁰

〈第十四番目の州〉

オハイオの諸部族の大半がイギリス側との同盟に入った状況において、大陸会議のインディアン政策の転換、つまり軍事同盟の具体的な標的となったのは、最後までアメリカ側との間に平和的な関係を保とうとしていたデラウェアの人びとだった。一七七八年九月、ピッツバーグで大陸会議とデラウェア族との間に条約会議がもたれ、ここでついにデラウェア族はアメリカの革命政府を支持する立場を明確にした。デラウェア族をアメリカとの同盟に踏み切らせたい要因は何だったのか。それはデラウェア族の住むオハイ

オの土地に第十四番目のインディアンの州を新設するというものだった。これはホワイト・アイズが七五年の平和条約以後大陸会議に要請し続けてきた最大のポイントだったが、その代わりとして大陸会議側の出した条件には、アメリカ軍のデトロイト攻略にデラウェア族が協力すること、具体的にはピッツバーグからデトロイトへのルートとなるデラウェア領におけるアメリカ軍の通行権の許可、食糧・兵力・案内人の提供が含まれていた。そしてオハイオ・インディアンの中で唯一のアメリカ同盟軍となったデラウェア族の家族を敵の攻撃から防衛するという名目で、オハイオ北西部にアメリカ軍の砦を建設することも認められた。ただちにビーバー川流域にフォート・マッキントッシュが、そしてモラビア派の伝道村からほんの二〇マイルほど北のタスカラワ川上流域にフォート・ローレンスが築かれた。

第十四番目のインディアンの州について言えば、当時の大陸会議は新州を創設する権限をもたなかった。この条約会議に大陸会議代表として出席したのは、バージニアとペンシルベニアからのコミッショナー、それにワシントン配下の軍関係者であり、インディアン政策の変更に対処していたインディアン問題中部地区担当官のジョージ・モーガンはこの条約会議構成員からはずされていた。アメリカ側が最初からインディアンとの約束を守る姿勢になかったこ

とは明らかだった。一方、アメリカ側との条約義務を果たそうとしたホワイト・アイズは、千三百人のアメリカ軍をピッツバーグからデトロイトに案内する途中でアメリカ兵に暗殺された。しかしその死因は当初天然痘によるものと発表された。すでにイギリス側についていたキャプテン・パイプは、この条約会議に出席し署名はしたものの、最初の決心を変えることなくサンダスキーに戻った。

結局七八年の条約もたらしたものはデラウェア族の分裂だった。ホワイト・アイズの死後、アメリカ側への不信を募らせた人びとはイギリス側につき、アメリカ側にとどまる者は身の安全を求めてピッツバーグへ避難した。両軍の狭間になお平和主義を掲げて無防備のままとどまったのは、モラビア派の伝道村に身を寄せるインディアンだけになった。

〈グナーデンヒュッテンの虐殺〉

イギリス軍と同盟したインディアンによる白人入植地への襲撃に対して、アメリカ側からの反撃も激しさを増した。七九年にはイロコイ連合のセネカ族とカユガ族の住むニューヨーク西部一帯が、アメリカ軍のサリバン將軍指揮下の軍隊四千人によって焦土と化した。ペンシルベニアやバージニアの開拓農民のインディアンに対する敵意と憎悪が日毎

に高まる中で、一七八〇年四月、ペンシルベニア議会は男女人齢を問わずにインディアンの頭皮に千ドルの報奨金を支払うことを定めた法律を通過させた。革命戦争はまさにインディアン征服戦争としての性格をあらわにしたのだった。

一七八一年夏、デトロイトのイギリス軍総指揮官ドゥパイスターは、クリスチャン・インディアンとモラビア派宣教師をオハイオ渓谷から追放する命令を下した。九月にはジョースバーガーら三人の宣教師が捕虜とされ、デトロイトまで連行されることになった。クリスチャン・インディアンもイギリス同盟軍のインディアンが多く住むサンダスキー川流域の村に移され、オハイオの伝道村は廃墟と化した。

革命戦争中に起こった数々のインディアン虐殺のうちでもっとも悲劇的だったといわれるのは、クリスチャン・インディアン強制移住後の伝道村の一つ、グナーデンヒュッテンで起こった事件である。一七八二年三月はじめ、飢えをしのぐためにトウモロコシなどの食糧を集めにサンダスキーからグナーデンヒュッテンに戻ってきたクリスチャン・インディアンの一行を、ペンシルベニア西部、ワシントン郡の総勢一六〇人の民兵隊は見逃さなかった。大人六二人（三分の一は女性だった）、子供三四人の計九六人全員に死が宣告された。インディアンたちは賛美歌や祈りの言葉を

口にしながら、桶職人の使う木槌や斧で惨殺され、焼き殺された。事件の真相は、命からがら現場を脱出した二人のインディアン少年（一人は頭皮狩りされていた）によって伝えられた。サンダスキーのクリスチャン・インディアンはただちにイギリス軍の保護の下に、デトロイトより二〇マイル北のチベワ族の土地に避難した。^{②⑧}

一七八三年九月、パリ条約締結によりイギリスとアメリカ合衆国との間の戦争は終結したものとされた。しかし、オハイオ地域にかんする限り、軍事的には優位にあった親英派のインディアン連合軍にとって、パリ条約による五大湖南岸のインディアン領土の合衆国への譲渡はとうてい容認できないものだった。この知らせを受けるや否や、ワイアンドット、イロコイ連合、デラウェア、クリーク、チェロキーを含む三五部族の代表は、「すべての侵入者からの故国の防衛」を合言葉に、インディアン連合を結成した。^{②⑨}戦争開始時に大陸会議は諸部族に対してこの戦争は「身内の争い」だと語ったが、インディアンからの土地奪取を基本に据えたインディアン政策を英米のどちらもが共有していた点においては、まさに「身内の争い」そのものだったといえよう。インディアン側にとってさらに明らかになったのは、インディアン征服にかんする限りアメリカに新しく誕生した政府の方がはるかにその意思と実行力をもって

いるということ、そしてこれまで対英戦争に向けられていた軍隊がすべて西部に投入される可能性が高くなったということだった。

三 合衆国の独立とインディアン

〈インディアンの「文明化」と「アメリカ化」〉

革命戦争中の敵対的なインディアンによる白人入植地への襲撃に対してアメリカ側のとった報復手段は実質的かつ巧妙なものだった。それはイギリスから「譲渡」され新たに「合衆国領」となった西方領土にインディアン領と白人居住地域の境界線を設け、白人の入植領域をさらに西部に拡大しようとするものだった。

インディアンからの土地譲渡は、オハイオ川北西部にかんするものだけでも、次の四つの大きな条約が結ばれている。フォート・スタンウィクス条約（一七八四）、フォート・マッキントッシュ条約（一七八五）、フォート・フィニー条約（一七八六）、フォート・ハーマー条約（一七八九）。これらの条約によれば、インディアン諸部族はオハイオ川東側の土地をほとんど失うばかりか、川の西側のモラビア派の伝道村のあったマスキングム川、タスカラワ川の流域をも白人移住者に譲り渡すことになる。しかしそれ

それぞれの条約会議に出席し署名したインディアン代表が親米的であったことや部族全体の利益を代表していなかったこと、そして合衆国側が征服者としての強圧的な姿勢をとったことから、これらの条約はすべてインディアン連合から拒否された。世界で最強といわれたイギリス軍に対する勝利が即インディアン征服戦争の勝利へと結びついたわけではなかった。

インディアン諸部族の征服には軍事力の行使以外の方策が練られねばならなかった。一七八五年に陸軍総監に任命されたヘンリー・ノックス(Henry Knox, 1750-1806)は、インディアン戦争の原因が主にインディアン領土の境界線にあることを明らかにした上で、悲惨な結末をもたらさずであろうインディアン戦争に多額の費用をかけるよりはインディアン部族に土地の主権を認め、部族との平和的な交渉の道を選ぶことを合衆国連合会議に提案した。ノックスの提案は、インディアン諸部族を対等な交渉相手と見なすことにより、部族との取引に基づき土地を購入するという、いわばイギリスのインディアン政策の継承を意味していた。イギリスの政策を引き継ぐことは不名誉であるどころか、むしろ新国家の理念にかなうものである、というのがノックスの主張だった。

このノックスの提案は一七八七年に制定された北西部領

地条例に具体化された。北西部とは、五大湖、オハイオ川、ミシシッピ川に挟まれた地域を指すが、ここは合衆国に敵対的なインディアン連合傘下の部族が領土権を主張する土地でもあった。この条例の第三条は次の通りである。「……インディアンに対しては常に最高の信義が守られなければならない。インディアンの土地及び財産はかれらの同意なく収奪されてはならない。またかれらの財産、権利、自由は、連合会議が承認した正しい合法的な戦争の場合を除いては侵害されてはならない……」。しかしこの条例が北西部領地の統治方式を定めたものであったこと、将来的にはここに三〇五の州を新設し、それらをあらゆる点で独立一三州と対等の資格をもった州として連合会議に加えるという構想に基いていた以上、いずれこの領地の主権はすべてインディアン部族から合衆国側に移行されるという大前提がそこに働いていたことは明白だった。しかも連合会議はすでに一七八五年に公有地条例を制定し、西方領土への白人農民の入植は公有地の売却方式によることを明らかにしていた。それではインディアン諸部族からの最終的、全面的な土地譲渡を、ノックスはどのような方法で完結させようと考えていたのだろうか。

ノックスの提案以後も合衆国連合会議のインディアン政策の基本がインディアン諸部族の領土権の消滅におかれて

いたことには変わりはなかった。しかしイギリスの旧来のインディアン政策との間に本質的相違点があるとすれば、それは合衆国の指導者が抱いていたミッション川以東の広大な領土全域に完璧な主権の拡張を求める新国家構想と切り離しては考えられない。合衆国において、インディアンの領土権の消滅は、インディアンの死をもってしてではなく、「野蛮人の文明化」という大義名分の下に遂行されることになった。

新国家のインディアン「文明化」政策の中心にはキリスト教布教が位置づけられた。一九世紀に入り、プロテスタントの宣教師によるインディアンへの布教活動が活発になるのはこうした背景によっていた。宣教師たちはいわばノックスの「道具」と見なされ、結果的には政府の「文明化」政策への強力な助っ人の役割を果たしたのである。ノックスらは「文明化」の効果を、インディアンの男が狩猟をやめ鋤や鋤を手にする事で、女は野良仕事から家事に専念することで、子供は学校に通うことで、「野蛮人」の生活から脱皮し、インディアンが自ら進んで土地を手放すように仕向けることに期待した。インディアンから直接的暴力的に土地を奪うのではなく、かれらから伝統的な生活習慣や文化を奪い取ることで、換言すれば「強制」よりは「改宗」によって、インディアンの領土権の消滅を達成しよう

としたのである。²⁹⁾

しかしインディアンの領土権の消滅は、もちろんインディアンの内面からの「文明化」政策によってのみ達成されたわけではない。「文明化」が遅々として進まない場合でも白人移住者の西漸の波は着実に進行していた。ノックスは次のようにも言う。「(入植)人口が増大して境界線に近づくにつれて、獲物は減少し、新たな土地の購入はずっと安くつくに違いない。それが開拓のもたらす結果であり、今後もずっとそうであろう。」ノックス自身はインディアンの「文明化」は実行不可能であるとさえ観察し、もし可能だとしてもかなりの年月を要するであろうこと、結局は白人入植地の拡大によってインディアンは絶滅する運命にあるとみていた。つまりノックスらは、「文明化」政策によるインディアンの「アメリカ化」と、白人入植者の侵入によるインディアン領土の「アメリカ化」と、内と外、両面からの「アメリカ化」によってインディアンの領土権を消滅させようとしていたのだ³⁰⁾。

〈インディアン連合の敗北〉

一七八八年にはマスキングム川流域にオハイオ川以西での最初の白人入植地マリエッタが建設され、北西部領地の初代知事アーサー・セントクレア將軍はそこにワシントン

郡の設立を宣言した。翌八九年、セントクレアは、イロコイ連合とデラウェア族の中でも親米的な指導者との間に、オハイオ川北西部のワシントン郡を含む地域の土地売却を認める交渉を行ったが（フォート・ハーマー条約）、オハイオ川を白人居住地の西限線と見なしていたインディアン連合はこれに激しく抵抗した。オハイオ川を越えた北西部への白人移住者の増大は、同時にオハイオ川の南側、ケンタッキー北部の白人入植地の拡大をもたらし、ケンタッキー地域の人口は一七七四年にはわずか四百人足らずだったのが九〇年には七万三千人にまで膨れ上がった。

一七九〇年から一七九五年にかけてオハイオ北西部はふたたびインディアン戦争の舞台となった。九〇年にはマイアミ族の指導者リトル・タートルの率いるマイアミ族、デラウェア族、ショニー族を中心としたインディアン連合軍は、ジョサイア・ハーマー將軍指揮下の軍を破り（リトル・タートルの戦い）、九一年にはセントクレア將軍の遠征隊にも大打撃を与えた。一七九四年合衆国側は、インディアンから「狂気のアンソニー」「黒蛇」と呼ばれていた革命戦争の英雄アンソニー・ウェイブ將軍を指揮官とした三度目のオハイオ遠征軍を送った。ハーマー將軍とセントクレア將軍の遠征隊が主としてペンシルベニア、バージニア、メリーランドの民兵によって編成されていたのとは異なり、

今回は厳しく訓練された連邦の軍隊が差し向けられた。インディアン連合軍はついにフォールン・ティンバーズの戦いで敗北を喫し、一七九五年のグリーンビル条約を受け入れた。

この条約により、インディアン領と白人入植地の境界線はオハイオ川のはるか北方にまで引き上げられた。しかし北西部領地条例に記されているように、合衆国政府はインディアン部族が譲渡していない土地についてはインディアンの権利を正式に認めたのだ。ちなみにインディアン連合がフォールン・ティンバーズの戦いに敗れた年は、ペンシルベニア西部でウイスキー反乱が起こり、ワシントン大統領は反乱鎮圧を名目に連邦軍を西部に進軍させ、連邦政府と連邦軍の威力を国民に顕示した年でもあった。

インディアン連合がオハイオ川以西の領土権を主張して合衆国の侵略に抵抗して戦った一七八三年から九五年までの一二年間、イギリス軍とそのインディアン同盟軍によってマスキング川流域の伝道村から強制移住させられたクリスチャン・インディアンとモラビア派宣教師の一行は、避難所を求めて転々としていた。グナードンヒュッテンの虐殺事件の直後、カナダのチペワ族の土地に避難しニューグナードンヒュッテンを築き、そこに八六年春まで滞在した。フォート・フィニー条約によりオハイオ東部に平和が

戻ったかに見えた頃、モラビア派一行はエリー湖を渡りオハイオ側のカヤホガ川流域に移り、そこに新しい伝道村ピルゲラ（巡礼者の憩いの意）を築いた。しかし情勢はふたたび悪化し、クリスチャン・インディアンもインディアン連合とともに戦うべきだとする圧力は日毎に強められた。アメリカ側からの食糧や物資の援助が途絶えていた以上、クリスチャン・インディアンはインディアン連合とイギリス軍の保護下に入るより他に生き残る道はなかった。八七年夏、一行はインディアン連合勢力の影響力の強いヒューロン川流域のピトコッティングに腰を落ち着けることに決めた、ここをニューセイラムと名づけた。この間クリスチャン・インディアンの中には戦争に巻き込まれるのを避けて白人勢力の及ばないはるか西方に移住する者もあり、ニューグナーデンヒュッテンの住人は一七八五年時点で二七人、ピルゲラ（一七八六）では九五五人、ニューセイラム（一七九〇）では二二二人だった。³³

クリスチャン・インディアンとモラビア派宣教師が、これらの故郷ともいえるマスキングム川流域の旧伝道村へ帰る望みをまったく断ち切られたのは、合衆国のオハイオ遠征軍が一七九〇年、九一年と二度にわたりインディアン連合軍に敗北したとの知らせを受けたときだった。一七九一年五月、モラビア派の一行はふたたびエリー湖をカナダ側

へ渡り、デトロイトに近いディーウォルトに移住した。このときには一五八人のインディアンが一緒だった。翌年にはさらに北上し、テムズ川流域のフェアフィールドに移り、そこに九八年春まで滞在した。フェアフィールドの住人は九八年段階で一七二人と記されている。³⁴

革命戦争中も、その後のインディアン連合と合衆国との戦争中も、クリスチャン・インディアンとモラビア派宣教師の一行は、平和・中立の立場を主張しながらも、心情的にはつねにアメリカ側を向いていた。一七八三年に合衆国がイギリスからの独立を達成すると、東部のモラビア教会はただちに、マスキングム川流域の伝道村のあった土地のクリスチャン・インディアンへの付与を希望して、連合会議にその請願を行っている。連合会議は八五年の公有地条例でこの請願を正式に承認し、四千エーカーの土地の付与を決定した。³⁵しかし土地の測量が開始されたのは九七年に入ってからのものであり、一行がマスキングム川流域の地にふたたび足を踏み入れたのは九八年になってからのことだった。

おわりに

革命戦争へのインディアンの対応は、デラウェア族の間

でも同様ではなかった。ホワイト・アイズに代表される人びとは、植民地独立の大義に部族の主権回復の願いを重ね合わせ、「文明化」を積極的に取り入れることに部族の命運を賭けた。またキャプテン・パイプのグループは、イギリス軍と同盟を結び白人侵入者から部族の土地を守るためにアメリカ軍との戦いに立ち上がった。そしてクリスチャン・インディアンは非戦の立場を貫くことで危機を乗り越えようとした。

このような対応の違いはデラウェア族に限らず他の部族にも共通する現象であったが、デラウェアの場合、とりわけ「文明化」の受け入れについての評価の違いが、一七七八年の部族の分裂を生み出したといえる。クリスチャン・インディアンもモラビア派宣教師を介して「文明化」に接近していたという点では、この分裂と無縁ではなかった。しかしアメリカ側についたとはいえ、「文明化」に肯定的に対応した人びとがヨーロッパ人到来以後の悲惨な体験を忘れたわけでは決してなかった。むしろ新たに誕生した合衆国への批判や怒りをイギリス側についた人びとと同様に抱えながらも、直面する危機に対してかれらなりに「現実的」な選択を下したのだった。

革命戦争に対して、また「文明化」受け入れに対して、インディアン側に受け止め方の違いがあったにせよ、アメ

リカ側のインディアン政策の基本は一貫していた。インディアン領土権の消滅がそれである。一七八三年のパリ条約によるイギリスからの土地「譲渡」はインディアン領の征服にほかならない、というのが合衆国側の主張だった。しかしインディアン連合の激しい抵抗は合衆国政府がこの主張を前面に掲げることを許さなかった。インディアン連合軍がウエイン將軍率いる連邦軍にフォールン・ティンバーズで敗北を喫し、その結果一七九五年に結ばれたグリーンビル条約でさえも、部族が正式に譲渡していない土地についてはインディアン側にその所有権を認めたのだった。ただし一九世紀に入り、一八一二年戦争後インディアン勢力と合衆国との力関係が逆転すると、ふたたび征服の論理が声高に叫ばれるようになった。条約で認められたインディアンの土地所有権についても、ジャクソン政権の時代には「征服者のお情けによるもの」だと公言されるようになった。³⁷⁾ 一九世紀のインディアン「文明化」政策はこうした力関係の中で推進されていったのである。

最後にデラウェア族とモラビア教徒との関係についてである。一七四〇年の布教開始以来一八一五年までに戦争中の避難地を含めモラビア派は全部で三二の伝道村を築いた。そのうち一九〇三年まで存続したカナダの一村を除くと、一八二二年までにすべてが消滅している。³⁸⁾ 一八一二年戦争

の影響もあるが、グリーンビル条約以後、デラウェア・インディアンの大半が、マスキング川流域の伝道村の土地が確保されていたにもかかわらず、白人入植地となったオハイオ東部を離れてインディアナ領地へ移住したことが主な理由である。白人居住地域付近でのインディアンへの布教活動は不可能であるとモラビア教徒が悟ったのは、ポンティアック戦争の頃だった。それ以後伝道村はオハイオ北西部に移されたが、このことはインディアン「文明化」と白人「文明社会」の拡大とが両立しえないことをすでに暗示していた。

「アメリカのすべての野蛮人に文明か、さもなくては死す」これは一七七九年七月四日の独立記念日に、イロコイ領の焦土作戦を前にしたサリバン指揮下の酔った兵士たちが乾杯のときに叫んだ言葉だった。⁽⁸⁾ ここには当時のフロンティア地域の白人入植者のインディアン観が代弁されていたといえる。「文明化」がインディアン⁽⁹⁾の伝統文化を否定し「アメリカ化」を意味していた以上、また「文明化」政策がインディアンの領土権の消滅を目指していた以上、キリスト教や「文明」を伝統的生活習慣の中に柔軟に取り入れようとしていた人びとにさえ、「文明社会」は居場所を用意してはいなかったのである。

註

(1) Helen Horn Tanner, ed., *Atlas of Great Lakes Indian History* (Norman: University of Oklahoma Press, 1987), pp. 65-66 によれば、フォート・スタンウックス条約が結ばれた一七六八年当時、五大湖地域中心部のインディアン人口は約六万人と推定される。そのうちデラウェア族とその一族であるマンシー族を合わせた人口は約三五〇〇人とされている。

(2) インディアンへのキリスト教布教に関する代表的な研究には次のものがあろう。Robert F. Berkhofer, Jr., *Salvation and the Savage: An Analysis of Protestant Missions and American Indian Response, 1787-1862* (Lexington: University of Kentucky Press, 1965); William G. McLoughlin, *Cherokees and Missionaries, 1789-1839* (New Haven: Yale University Press, 1984); George A. Schultz, *An Indian Canaan: Isaac McCoy and the Vision of an Indian States* (Norman: University of Oklahoma Press, 1972); Henry Warner Bowden, *American Indians and Christian Missions: Studies in Cultural Conflict* (Chicago: The University of Chicago Press, 1981)。また最近の Philip Earl P. Olmstead, *Blackcoats among the Delaware: David Zeisberger on the Ohio Frontier* (Kent: The Kent State University Press, 1991) がある。

(3) James Ronda and James Axtell, *Indian Missions: A Critical Bibliography* (Bloomington: Indiana

アメリカ革命とインディアン・デラウェア族・モラビア教徒・北西部(白井)

- University Press, 1978), p. 20.
- (4) 訳はアメリカ学会訳編『原典アメリカ史』第二巻、岩波書店、一六三版、一六三。
- (5) Elma E. Gray, *Wilderness Christians: The Moravian Mission to the Delaware Indians* (New York: Russell & Russell, 1956, reissued 1973), p. 21.
- (6) *Ibid.*, p. 24; John Heckwelder, *A Narrative of the Mission of the United Brethren among the Delaware and Mohegan Indians* (Philadelphia: McCary & Davis, 1820), pp. 17-19.
- (7) エロン連合とインディアン族との関係については、拙稿「『友好の森』の遺産—ペンシルニア植民地のインディアンの政策」本田創造編『アメリカ社会史の世界』三省堂、一六三、pp. 291-325 を参照されたい。
- (8) Olmstead, *Blackcoats*, p. 5.
- (9) キョウト派の近親性の規律について、*Ibid.*, pp. 246-247; Heckwelder, *Narrative*, pp. 122-124.
- (10) *Ibid.*, pp. 34, 38, 39.
- (11) Olmstead, *Blackcoats*, p. 6.
- (12) *Minutes of the Provincial Council of Pennsylvania* (*Colonial Records*) IX (Harrisburg: The Pennsylvania Historical and Museum Commission, 1852), pp. 61, 62, 100; C. Hale Sipe, *The Indian Wars of Pennsylvania* (Harrisburg: The Telegraph Press, 1929, reprint 1971), pp. 463-469; Heckwelder, *Narrative*, pp. 77-80.
- (13) *Ibid.*, p. 88.
- (14) *Ibid.*, p. 144; Olmstead, *Blackcoats*, p. 8; Tanner, ed., *Atlas*, pp. 65-66.
- (15) Gregory Schaaf, *Wampum Belts & Peace Trees: George Morgan, Native Americans and Revolutionary Diplomacy* (Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 1990), p. 96.
- (16) *Ibid.*, p. 83.
- (17) *Ibid.*, pp. 78-81.
- (18) *Ibid.*
- (19) *Ibid.*
- (20) Heckwelder, *Narrative*, pp. 145, 150, 164, 178; Olmstead, *Blackcoats*, p. 17; C. A. Westlager, *The Delaware Indian Westward Migration* (Wallingford, Pa.: The Middle Atlantic Press, 1978), p. 38.
- (21) Schaaf, *Wampum Belts*, p. 199; Westlager, *Delaware Indian*, pp. 39-40.
- (22) Schaaf, *Wampum Belts*, pp. 199-200; Olmstead, *Blackcoats*, p. 29.
- (23) Westlager, *Delaware Indian*, p. 29.
- (24) Sipe, *Indian Wars*, pp. 599-606; *Pennsylvania Archives* First Series VIII (Philadelphia: Joseph Severns, 1855), pp. 369, 393; *Colonial Records* XII, p. 632; Schaaf, *Wampum Belts*, p. 202. ニューモーンの焦土作戦についてはインディアンはサリメントの手紙で次のように述べられている。「前年の田舎はなれたインディアン」の

- 社をよむに破獲し其跡を中ねりしは其の。地上の作物を全獲
 せし一度の耕作は其のなごりなりたるに其の肝心の也。』
 Wilber Jacobs, *Dispossessing the American Indian:
 Indians and Whites on the Colonial Frontier*
 (New York: Charles Scribner's Sons, 1972), p. 155.
- (25) Heckwelder, *Narrative*, pp. 251-277; Eugene F.
 Bliss, ed., *Diary of David Zeisberger: A Moravian
 Missionary among the Indians of Ohio I* (Cincinnati:
 Robert Clark, 1885, reprint 1972), p. 9.
- (26) *Pa. Archives First Series IX*, pp. 523-525;
 Heckwelder, *Narrative*, pp. 320-327; Olmstead,
Blackcoats, p. 55; Sipe, *Indian Wars*, pp. 647-654;
 クノン・シヤクタン「宣教師の日記」『アメリカ中興文庫
 一四 アメリカ・インディアン』研索社 1974 年 12月 15日
 pp. 162-168.
- (27) Weslager, *Delaware Indian*, p. 46.
- (28) James Merrell, "Declaration of Independence:
 Indian-White Relations in the New Nation," Jack P.
 Greene, ed., *The American Revolution: Its Character
 and Limits* (New York: New York University Press,
 1987), p. 203.
- (29) Merrell, "Declaration," p. 204; 富田虎男「開拓
 史のキー・マン・インディアン」『歴史学雑誌』第31(1981)号
 pp. 1-10.
- (30) Robert F. Berkhofer, Jr., *The White Man's
 Indian: Images of the American Indian from*
- Columbus to the Present* (New York: Vintage Books,
 1979, reprint of 1978), pp. 135, 144.
- (31) Tanner, ed., *Atlas*, p. 89.
- (32) Heckwelder, *Narrative*, p. 405; Olmstead, *Black-
 coats*, p. 82.
- (33) *Ibid.*, pp. 66, 76.
- (34) *Ibid.*, pp. 82, 91, 98.
- (35) *Ibid.*, p. 68.
- (36) Heckwelder, *Narrative*, p. 395.
- (37) Merrell, "Declaration," p. 216.
- (38) Olmstead, *Blackcoats*, pp. 241-242.
- (39) Roy Harvey Pearce, *Salvation and Civilization: A
 Study of the Indian and the American Mind*
 (Berkeley: University of California Press, 1988), p. 55.

(東京国語大学)